
とある一族の話。

ケイスクンブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある一族の話。

【Nコード】

N9610G

【作者名】

ケイスコンプ

【あらすじ】

闇夜の森。背の高い木に一羽の影。その影は闇夜も切り裂く鋭い翼を持ちその影の眼は赤く揺らめいていた。まるで獲物を狙うカラスのようにガラガラと揺らめいている。「モクヒヨウ、カクニン。」と呟くと影は狙撃銃のスコープを覗いた。その1里先には、炎一族の集落そして、窓越しに映る村長の遜炎。クロスバーを遜炎の頭に合わせ、引き金を引いた。「ズパーパーパーン」風ひとつない静かな森に銃声が鳴り響いた。

闇夜の森。

背の高い木に一羽の影。

その影は闇夜も切り裂く鋭い翼を持ち

その影の眼は赤く揺らめいていた。

まるで獲物を狙うカラスのように

ギラギラと揺らめいている。

「モクヒヨウ、カクニン。」

と呟くと影は狙撃銃のスコープを覗いた。

その一里先には、炎一族の集落

そして、窓越しに映る村長の遜炎。

クロスバーを遜炎の頭に合わせ、引き金を引いた。

『ズパーーーーーーン』

風ひとつない静かな森に銃声が鳴り響いた。
すると、

『バサバサ、バアサツバサ』

『カアアア、カアアカアア』と

木から大群のカラスが飛び立った。

「襲撃だあー」

『ダン』

勢いよく開かれる扉

「何事だ！」

「族長、焰魔様！村長が撃たれ、空からカラスの大群が」

「何！？村長が？くそっ！カラスどもを焼き払え！！」

「炎術操炎砲起動！標的確認！」

「起動率…100%！」

「操炎砲発射！」

「ダメだ！お前は烈火を守り、安全の確保を優先せよ！」

「…クツ…了解…」

「豪炎！」

「はい！？」

「…烈火を頼んだぞ」

「了解！」

豪炎は焰魔を背に部屋を後にした。

長い廊下の先に烈火の部屋はあった。

『ガチャ』

「烈火様お逃げください！！！」

「何があつたんだ！？」

「敵襲です！」

「なんだって！！」

「敵はカラスを操り相当の手練かと、ここは危険です！私と一緒に逃げ下さい！」

「イヤだ！！俺も戦う！！」

「いけません！烈火様は私と一緒に逃げるのです！」

「でも…そうだ！父さんは！？」

「今必死で戦つてます！」

「だったら、俺も！！」

「駄目です！！」

「焰魔様は村人のため、そして烈火様、あなたのために戦われております！」

「…お…俺は…」

長い沈黙の後

「烈火様！！」

「…分かった」

烈火は涙をグツとこらえ豪炎と共に、部屋を出た。

「焰魔式操炎術、双炎龍」

焰魔の両腕から炎の龍が繰り出された。

『ゴアアアアオン』

ゴオゴオと燃盛る龍はカラスに喰らいついた

『グシャグシャ ボォーボォーオー』

焰魔の双炎龍はカラスを食らいつき焼き尽くした。

「皆、大丈夫か!!!」

「へっ!これくらい余裕つすよ!」

「カラスなんぞ、炎一族も舐められたもんじゃな!」

「皆、気を抜くな!!!」

と隊長が喝を入れた瞬間

『パン パン パン』

「な…何だ…と…グハッ」

「隊長!!!?」

「ス…スナイパーだ!」

「隊長がやられたぞ!!!」

「狼狽えるな!操炎遮弾気を纏え、打ち抜かれるぞ!!!」

炎一族は実弾を遮断するオーラ、操炎遮弾気を纏い影に対抗した。

だが…

『カアアアアアアアア』

「何!」

四方から夥しいカラスの群れが炎一族の集落を取り囲んでいた。

そして、瞬く間に集落はカラスの群れに覆われた。

空はカラスの群れに遮られ、集落に闇が訪れた。

『シユン』

闇を切り裂くような鋭い一撃

「うわわああー!…ドサッ

「何をしている!早く火を灯せ!」

『ボワッ』

井は焼け落ち

そこから蒼き龍が現れた。円陣に向け一直線に降りて行く。神々しく煌く蒼炎の龍の名は、

「蒼炎龍・法燈、光臨！」

法燈の蒼炎が天空を焦がし闇が晴れていく。法燈は狙いを黒い影に定め突き進む。

一瞬黒い影の眼が赤く光った。そして片手を龍の方に突き出した。すると龍の突進を片手一本で食い止めた。

『グゴオオオオオオオ』法燈は喰い殺そうと喰らいつく、…が

「法燈が押されているだど!? それも片手でだど! ツクこのままで、は、

仕方がないあれを使うしか、呪いの禁術。紫炎術を…」

「はああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

焰魔の呪われた右腕から紫色の炎が滲み出る。

「がああああああああああああああああああああああああああああああ
つつつつはあつ!!!!!!!!!」

紫炎の力を法燈に流し込む。すると蒼かった炎が徐々に紫に変わっていく。

法燈は紫炎の力により火力が増していた。

黒い影はもう片方の手を突き出した。

「フンムウウウウウウウウ!!!」

力は互角、が呪いの力は格段に火力が上がるが、体力の消耗が激しく、長期戦には向かない。

「一気に決める!!!」

「うぐつうううううううううううううううううううううううううううううう
あああ!!!!!!」

余りにも強大な火力に焰魔の右腕は焦げ付いていた。

「この右腕が無くなるうともお前だけは倒す!!!」

「はあああああはつ!!!!!!!!!!!!!!!」

「紫炎龍・焰魔燈衝咬！！！」

エンマトウシヨウコウ

『ギヤオオオオオオン グチャグシャ…ボト…ボト、ボト…グシヤン！！！！！！』

紫色の法燈は影の腕を二本を食い千切った所で息絶えた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

黒い影の耳を劈くような鳴声が響き渡った。

『バサバサツバサツバサツバサバサツバサアアバサアア』

両腕を失った黒い影は天に舞、闇夜へと消え去って行った。

「…闇の暗殺者…鴉…一族…これほどの力だったとは」

『バタツ！！』

「焰魔様！！！！」

「ッ！！」

「どうしました！？烈火様？」

暗い森の道を立ち止まる、烈火。

「……………う……………うんづく……………と……………父さ……………んづくがあ……………父……………さんがあ……………！！」

突然泣き出し、そのまま泣き崩れてしまった。

「烈火様！？烈火様！？」

豪炎に肩を揺さぶられる烈火。しかし烈火は

「父さんがあ…父さんがああああ！！」

「ま…まさか焰魔様が！??」

「うぐ…うつく…ひつ……………し…ひつく…し…死んじやったああよお
おおお！！！！」

命の灯火がひとつ消えた。あれほど燃え盛っていた命の灯火が熄えた。

『ポツ……………ポツ…ポツポツ…ザアア…アアア』

暗い森に冷たい雨が降る。

「うわああああああん」

「烈火様…」

豪炎は小さく蹲る烈火を抱きしめた。

「大丈夫です。烈火様は…烈火様は私がお守りします。烈火様の命は、焰魔様との約束は…この命に代えても、この豪炎がお守りします。」

この日を境に俺は泣く事は無かった。

あの日俺は、父さんを亡くした。

それは十年前の話だ。

今、俺は復讐の為に命を燃やしている。

豪炎と共にあのカラスを追って、父の仇を取るために、町を転々とし、情報を掻き集めた、が何ひとつ奴等に関する情報が無い。

何一つもだ、この十年間調べ歩いたが、何ひとつ情報が無い。

炎一族がカラスに襲われたあの日は、

「炎一族、謎の失踪。炎一族全滅か!？」

と当時は騒がれたが半年もすれば皆そんな事は忘れ、

今となつては、「炎一族?何それ、おいしいの?」といった感じだ。

炎一族は忘れられていた。まるで元々存在しなかったかのように。父が死んで三ヶ月後、当時同盟を組んでいた雷一族イカステの街に寄ったとき、

「炎一族の豪炎だ、雷一族族長にお会いしたい。」

「すみません。アポの無い方とは、」

「いやそんなはずは!我々は炎一族はあなた方と同盟を組み、」

「しつこいぞ!我らは雷一族は炎一族など知らんし、同盟を組んだ覚えは無い!おい!衛兵!」

「もういい、帰ろう豪炎。」

「…了解。」

「雷一族なら何か知っているかと思っただが、まさか門前払いを食らうとは」

いったいどうしてだ、どうして誰も炎一族を憶えないのだ。

おかしい、何かおかしい。一般人が知らなくても、雷一族が我々を知らないのは、おかしい

あやしい、何かあやしい。雷一族は何か隠している。カラスとの関連性も無いとは言い切れない。

くやしい、何かくやしい。誰も炎一族知らないし。カラスに関する情報もゼロだ。

そう思っても今となっては十年近く前の出来事だった。もう炎一族など、いないに等しい。

「俺ら二人では炎一族を名乗っても誰も信用しないし、誰も憶えていない…滅びたも当然だな」フツと笑う烈火であった。

「そんな事はありませんよ！烈火様！私達が生きている限り炎一族は滅びません！」

「…そうだな。すまないな、豪炎。」

「いや、豪炎には感謝をしているんだ。あの日家族を失って俺の心は今にも消えそうだった、その心に

再び火を灯してくれたんだ。俺には父さん以外家族はいなかったけど、

お姉さんとはこういうものかなと思えたんだ。いままで、本当にありがとう！豪炎！」

「そそそそんな事言われちゃったら、照れちゃいますよ。」

「八八八ッ」

烈火たちは街の寂れた居酒屋で豪炎と立ち話をしていた。

烈火は時計を凝視していた。『チツチツチ…ゴーン…ゴーン』午前零時に鐘がなった。

「あれから、十年かあ…皮肉なもんだな、誕生日が父さんの死んだ日と同じなんて…」

「そんなこと言われちゃあ、素直に誕生日おめでとぅって言えないじゃ、ありませんか！烈火様！」

「そうだよな、すまないな。」

つとそのとき、厨房の奥から

「おいバイト！！サボってんじゃない！真面目にやれ！」

「すみません。」

頭を下げる二人だった。

『ガラガラ』

「いらつしゃいませ！こちらのお席へどうぞ！」

豪炎が席を案内する。

「ご注文の方お決まりになりましたら、お呼びください。」

と言い放ち、カウンターにもどる。

「…すいませーん！生三つ下さい。」

注文を言う客に烈火と豪炎は声を合わせて言った。

「はいっ！！よろこんでええー！！！！！」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9610g/>

とある一族の話。

2010年11月5日07時23分発行